

岩槻城と城下町模式図

江戸時代後期の岩槻城・城下町絵図をもとに、現在の公共施設などを表示したものです。

絵図で
知る

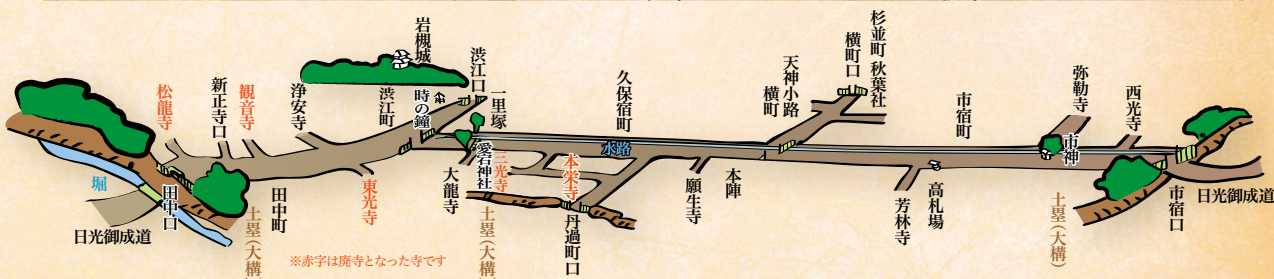
岩槻城と城下町



日光御成道道中絵図に見る城下町の町並み

江戸時代後期の道中絵図に描かれた久保宿町と市宿町。町境の木戸で区画された街道沿いに商家が軒を連ね、その手前には大構、奥には岩槻城が描き込まれており、城下町岩槻の景観が手に取るようになります。

■原資料…「日光道中絵図」（独立行政法人国立公文書館内閣文庫所蔵）



岩槻城

岩槻城は室町時代末に築かれた城郭です。明治時代の初期まで存続していました。

16世紀の前半には太田氏が城主となっていました。永禄10年(1567)三舟山合戦(現千葉県富津市)で太田氏資が戦死すると小田原城の北条氏が直接支配するところとなりました。しかし、天下統一を目指して関東への進出を図っていた豊臣秀吉と対立。天正18年(1590)5月20日からの豊臣方の総攻撃を受けた岩槻城は2日後の22日に落城しました。同年、豊臣秀吉が北条氏を滅ぼすと徳川家康が江戸に入り、岩槻城も徳川の家臣高力清長が城主となりました。

江戸時代になると岩槻城は江戸北方の守りの要として重要視され、幕府要職の譜代大名の居城となりました。明治維新後に廃城となり、城の建物は各地に移され土地は払い下げられて、およそ400年の永きにわたって続いた岩槻城は終焉の時

を迎えました。

岩槻城が築かれた場所は現在の市街地の東側で、元荒川の後背湿地に半島状に突き出た台地の上に、本丸、二の丸、三の丸などの主要部が、沼地をはさんで北側に新正寺曲輪が、沼地をはさんだ南側に新曲輪がありました。主要部の西側は堀によって区切られ、さらにその西側には武家屋敷や城下町が広がっていました。また城と城下町を囲むように大構が造られました。

現在では城跡のなかでも南端の新曲輪・鍛冶曲輪跡(現在の岩槻城址公園)が県史跡に指定されています。どちらの曲輪も戦国時代末に北条氏によって造られた出丸で、土塁・空堀・馬出など中世城郭の遺構が良好に残されており、発掘調査では北条氏が得意とした築城術である障子堀が見つかっています。

城下町岩槻

鎌倉時代から室町時代頃の岩槻は、奥大道と呼ばれる鎌倉街道の一つが元荒川(当時は荒川の本流)を渡る地点にあたっていました。幹線道と水上交通路でもある大河が交差する岩槻の地には、城下町の成立以前に町場が形成されていた可能性があります。

戦国時代になると、交通の要衝でもある岩槻には岩槻城が築城され、城を中心とする都市形成が本格化しました。この頃には久保宿・富士宿・渋江宿などが文献資料に現れ、市町などの町場の形成が進んでいました。城下町岩槻の成立です。そして、戦国時代の末、天正15年(1587)頃には、城下町の周囲に大構と呼ばれる土塁と堀が築かれ、岩槻城と一体化した形で城下町が確立しました。

江戸時代を迎えると、近世の身分秩序に基づき城下町が再編され、大手門外の一帯を中心に武家地(武家屋敷ゾーン)、街道沿いには町屋(商工業ゾーン)

が配置されました。また、旧来の街道は日光御成道として整備され、城下町はその宿場ともなりました。

武家地内は諏訪小路、裏小路などの街路名で呼ばれ、生垣や板塀で区画された広大な武家屋敷が形成されました。大構の出入り口と、武家地・町屋間の出入り口は口と呼ばれ、門・木戸が設けられていました。時の鐘は、寛文11年(1671)、岩槻城主阿部正春が、渋江口に設置したものです。享保5年(1720)、鐘にひびが入ったため、当時の城主永井直信(直陳)が改鋳させたものが現在の時の鐘です。

町屋では、「うなぎの寝床」などといわれる細長い区画に区分され、さまざまな業種の商家が通りに面して店を構えていました。町場の中心である市宿町では、戦国時代以来の六斎市(毎月六回開かれる定期市。市宿では一と六の付く日に開かれました)も開かれ、特産の岩槻木綿の取引などでにぎわいました。

さいたま市立博物館

さいたま市大宮区高鼻町 2-1-2
電話 048-644-2322
FAX 048-644-2313



岩槻郷土資料館

さいたま市岩槻区本町 2-2-34
電話・FAX 048-757-0271



岩槻藩遷喬館

さいたま市岩槻区本町 4-8-9
電話・FAX 048-757-5110



開館時間(各館共通) 9:00 ~ 16:30

休館日(各館共通) 月曜日(休日を除く)、休日の翌日(土曜日・日曜日・休日を除く)、年末年始(12/28 ~ 1/4)

※休館日は変更することがありますので、各館にお問い合わせください。